

## *A Passage to India* に見る他者理解の可能性

松林和佳子

はじめに

イギリス支配下のインドを舞台に様々な人間の交流を描いた E. M. Forster の *A Passage to India* (1924) は、近年では、ポストコロニアル批評やフェミニズム批評・ジェンダー批評の観点から、度々論じられるようになってきた。ポストコロニアル批評では、『インドへの道』に描かれるインドが、文明国ヨーロッパの規範から外れた「他者」の表象として論じられ、そこに見られる「他者」に対する支配欲が問題視される。一方、フェミニズム批評は、西洋に対する東洋、イギリスに対するインドと同じように周辺化された女性に焦点を当て、『インドへの道』に見られる世界が究めて男性的・父権的社会であることを明らかにしている。また、ジェンダー批評では、『インドへの道』におけるセクシュアリティが注目され、異性愛主体の社会に抑圧された著者自身の同性愛的欲望について論じられている。これらの批評に共通していることは、それぞれ、ヨーロッパ（支配者）／非ヨーロッパ（被支配者）、男性／女性、異性愛／同性愛という二項対立に注目し、その複雑な関係が論じられているということである。<sup>1</sup> Sharp が指摘しているように、『インドへの道』を扱う批評の関心は、時代とともに物語の中核とも言える the Marabar Caves の謎の解明から、人種やジェンダーの問題へと移動しつづけると言えるだろう (Sharp 76)。

『インドへの道』以前の長編小説からも分かる通り、様々な二項対立とその融和という問題は、フォースターにとって小説の重要なテーマであった。従って、『インドへの道』に描かれる二項対立の問題に現代社会的な観点から新たな光を投じた分析は、大変興味深いものである。しかし、それに伴っ

て、多くの批評家が注目するマラバー洞窟の謎が、ジェンダー批評やポストコロニアル批評的な解釈によって意味付けされる傾向にあると言えるかもしれない。本稿では今一度マラバー洞窟の表象に注目し、性差や異民族といった枠組みだけではなく、あらゆる人間関係における他者理解という問題を考えてみたい。具体的には、2人のイギリス人女性、AdelaとMrs Mooreの洞窟での体験を手がかりに、彼女達の他者に対する姿勢について検討し、彼女達の思考や価値観が他者を理解する上での壁となっている様を明らかにするつもりである。

### 1. 内面の反響としてのエコー

この物語の中で、マラバー洞窟は神秘的に描かれると同時に、アデラとムア夫人がともに精神をかき乱され、恐怖の体験をする危険な場所としても描かれている。彼女達の体験について検討する前に、マラバー洞窟の特徴について少し見ておきたい。マラバー洞窟の描写において、壁がそこにあるものの姿を映し出すほどに磨かれていること、また物音を立てるとエコーが生じるという2つの点に注目したい。<sup>2</sup> これらの特徴は、Crewsが“Caves' function of echoing only what is brought to them”と表現しているように、この洞窟がすべてをはね返す世界であることを示唆している (Crews 159)。

マラバー洞窟のエコーについては、次のように詳しい説明が付けられている。

There are some exquisite echoes in India; there is the whisper round the dome at Bijapur; there are the long, solid sentences that voyage through the air at Mandu, and return unbroken to their creator. The echo in a Marabar cave is not like these, it is entirely devoid of distinction. Whatever is said, the same monotonous noise replies, and quivers up and down the walls until it is absorbed into the roof. 'Boum' is the sound as far as the human alphabet can express it, or 'bou-oum', or 'ou-boum'—utterly dull. Hope, politeness, the blowing of a nose, the squeak of a boot, all produce 'boum'. Even the striking

of a match starts a little worm coiling, which is too small to complete a circle, but is eternally watchful. And if several people talk at once an overlapping howling noise begins, echoes generate echoes, and the cave is stuffed with a snake composed of small snakes, which writhe independently. (158 – 159)

この一節に示されている通り、洞窟のエコーは、単なる情報のはね返しではなく、希望が込められた言葉も、丁寧な言葉も、単なる物音も、すべてが「バウム」という音に還元されてしまうという。本来エコーとは、何物かによって発せられた音の反響でしかない。しかし、返ってくる音は、元の音よりも大きくなっていたり、低くなっていたり、何らかの変化が生じるため、元の音と全く違うもののように感じられることがある。マラバー洞窟のエコーは、すべてが「バウム」と聞こえるため、もとは自分自身が発したものだという事実を忘れさせてしまうという特徴があると言えるかもしれない。アデラとムア夫人がマラバー洞窟で体験する恐怖は、いずれも“a terrifying echo” (158) から始まっている。従って、エコーの特徴を考慮に入れると、2人の恐怖の原因は、洞窟に存在する何物かというよりは、彼女達自身の中にあるのではないかと思わせるのである。

## 2. アデラと他者イメージの限界

アデラは、嫌悪や軽蔑をもってインド人と接する他の在印イギリス人女性達と違い、積極的にインドの人々と交流を持とうとする若いイギリス人女性である。しかし、アデラがインド人との交流を望む原動力となっているのは、“I want to see the *real* India” (46) という好奇心であった。ここで、彼女が知りたがっている「本当のインド」とは、どのようなインドであるのか、考えてみたい。彼女は、自分が見たインドの印象について、“I’m tired of seeing picturesque figures pass before me as a frieze, ... It was wonderful when we landed, but that superficial glamour soon goes” (49) と述べている。彼女の言葉からは、自分の見ているインドは表面だけだと考え、それを不満に思っ

ていることが読み取れる。アデラは、後に“*There will have to be something universal in this country*” (156) と語っているように、装飾帯のような外観の奥にはきっと自分にも理解できる普遍的な概念のようなものが秘められていると信じていた。アデラの言う「本当のインドを知る」という行為は、その普遍的な概念を見付け出すことであったと思われる。アデラにとって、インド人と直接話をするということは、その探究を達成するための格好の手段であった。

インドに到着してから間もなく、アデラはインド人と交流する好機に巡り合う。彼女はブリッジ・パーティーに招待され、そこで2人のインド婦人を紹介された。彼女達は英語を話すことが出来、在印イギリス人女性の一人 Mrs Turton の言葉によると、“*westernized*” (62) された人々であった。アデラは、自分が現地語を話せないため、彼女達と直接話せないことを残念に思っていたので、彼女達が英語を話せることを知って、顔を輝かせる。“*But now we can talk; how delightful!*” (62) というアデラの喜びの言葉からは、英語という共通言語があれば、このインド婦人達と話をし、インドについて知ることが可能になるだろうという彼女の見解が窺える。後ほど Aziz に“*Then tell me everything you will, or I shall never understand India*” (91) と述べていることから分かるように、アデラは、インド人にインドについて語ってもらえば、その言葉を通じて、自分の求める本当のインドを知ることができると考えているのである。

しかし、英語が通じたにもかかわらず、インド人との初めての交流は、アデラ予想に反して、満足のいくものとはならなかった。次の一節には、その時の様子が描かれている。

Miss Quested now had her desired opportunity; friendly Indians were before her, and she tried to make them talk, but she failed, she strove in vain against the echoing walls of their civility. Whatever she said produced a murmur of deprecation, varying into a murmur of concern when she dropped her pocket-

handkerchief. (62)

ここで注目したい点は、インド婦人達が西洋的教育によって身に付けていた礼儀が、アデラとの間の壁となり、アデラと親しくなるのを妨げている点である。この場面からは、インド人との交流を望むアデラが、丁寧な態度や共通の言葉など、西欧的な礼儀作法や教養の模倣によって、インドの人々から拒絶されるという状況が浮かび上がってくる。

言葉が通じ、友好的な態度で接したにもかかわらず、なぜアデラはインド婦人と親しくなることに失敗したのだろうか。その原因は、アデラが自分の西洋的価値観で相手を理解しようとしている点にあると考えられる。アデラは、西洋人が企画する交流の場で、西洋化されたインド人達と、西洋の言葉である英語を通じて交流しようとしている点で、西洋文明に著しく頼っている。しかも、彼女がインド人と交流する目的は、彼女が頭の中で思い描く「本当のインド」の姿を見出すことであり、ありのままの相手の姿を受け入れる姿勢ではなかった。この点で、自らの価値観の枠に相手を押し込めようとする偏狭さが、アデラの中にも見られることは否めない。

Chandrapore の官立大学学長であるイギリス人 Fielding は、イギリス人女性についてアジズと議論していた時、アデラは気取り屋だと言って、次のように彼女を批判している。

'Oh, I don't know her, but she struck me as one of the more pathetic products of Western education. She depresses me. ... She goes on and on as if she's at a lecture—trying ever so hard to understand India and life, and occasionally taking a note.' (131)

フィールディングは、インドを理解するために、時にはノートをとったりしているアデラの熱心な態度に、半ば呆れている。さらに彼は、そのようなアデラの姿勢を、西洋的教育の影響とみなしている。彼は、アデラが西洋的価値観によってインドを解釈し、その枠に当てはめようとしていることに気が

付いていたのだろう。フィールディングの見解は、アデラとインドの関係を明確に言い表している。インドに対するアデラの態度は、フィールディングが表現している通り、講義に出席してノートをとる生徒のようなものだった。つまり、自らインドのコミュニティーの中に入っていきこうとするのではなく、離れた位置に留まってインドの日常生活を観察する姿勢であったと言える。

フィールディングは、最初はアデラを批判的な眼差しで見ているが、しだいに彼女の誠実さに好感を抱くようになり、最後には彼女のよき理解者となる人物である。物語の結末で、アデラがインドを去る時、彼はインドでの彼女の行動について、インド人に対する“real affection” (258) がなかったのだと指摘する。“The first time I saw you, you were wanting to see India, not Indians, and it occurred to me: Ah, that won't take us far. Indians know whether they are liked or not — they cannot be fooled here” (258) というフィールディングの言葉は、ブリッジ・パーティーでのアデラの失敗の理由をも言い当てている。アデラがインド婦人達と接触した目的は、自分が作り出したインドの理想像、アデラの言葉で言えば「本当のインド」を発見するためであり、彼女達を知ることはなかった。結局アデラにとって、インドの人々は「本当のインド」を導き出すのに必要な観察対象にすぎない。この点において、インド人全体を被支配民族として劣っていると見ていたイギリス人女性達と同じように、アデラの試みも自分の価値観にとらわれて、個人を無視した行為であったと言えるかもしれない。従って、たとえ表面上の言葉が丁寧で好意に満ちていても、彼女達を単なる観察対象ととらえ、真の愛情を抱いていなかったアデラが、彼女達から拒絶されたのは、当然の結果と思われる。

観察と分析によって世の中の出来事はすべて理解できると信じるアデラの考えは、マラバー洞窟を訪れた時に感じた恐怖によって打ち崩されることになる。アデラは、自分が洞窟の中で体験した恐怖の原因を、後から入ってきたアジズが、自分を暴行しようとしたからだと主張する。実際アデラに何が起こったのか、物語は明確な解答を提示していない。しかし、彼女が洞窟で

感じた恐怖も、壁を引っかく音や双眼鏡を落とした音の反響から始まったという点で、エコーと深く関わっている。洞窟から帰って来た後も、このエコーはアデラに絶えず付き纏う。洞窟の中で何が起こったのかを論理的に解明しようと試みると、必ず正体不明のエコーが戻ってきて、彼女の思考を攪乱する。次の一節は、その時の彼女の心の動きを描いた箇所である。

Adela was always trying to 'think the incident out', always reminding herself that no harm had been done. There was 'the shock', but what is that? For a time her own logic would convince her, then she would hear the echo again, weep, declare she was unworthy of Ronny, and hope her assailant would get the maximum penalty. ... And consequently the echo flourished, raging up and down like a nerve in the faculty of her hearing, and the noise in the cave, so unimportant intellectually, was prolonged over the surface of her life. She had struck the polished wall—for no reason—and before the comment had died away he followed her, and the climax was the falling of her field-glasses. The sound had spouted after her when she escaped, and was going on still like a river that gradually floods the plain. (200)

これまでずっと知性に頼って生きてきたアデラは、いくら考えても事態が好転しないという状況に大いに戸惑う。<sup>3</sup> 自分と同じように洞窟への遠出以来体調がすぐれないというムア夫人に、“Mrs Moore, what is this echo? ... Oh, do say! I felt you would be able to explain it ... this will comfort me so ...” (205) と言う彼女の訴えからは、エコーが何なのか、自分の思考によって明確な解答が出せない現状に苦しんでいる様子が窺える。そのため彼女は、その謎を言葉で説明してもらいさえすれば救われると信じているのだ。アデラがエコーに苦しめられるのは、いつも直面する出来事を受け入れやすく整えるフィルターのような役目を果たす思考が、エコーに関してはうまく機能していないからではないだろうか。

エコーとは、先に見たように、もとを正せば彼女自身が立てた物音のはね返りであり、彼女が洞窟に存在する何物かに怯えているというよりは、彼女

自身によって生み出された幻想に怯えていることを示す鍵だと言えよう。今までインドを観察し続けてきたアデラにとって、インド人のアジズと親しくなり、洞窟に案内してもらおうということは、観察者としての位置から動いて、インドの世界に入っていこうとする初めての試みであったと考えられる。この時、安全な観察者の領域から出ることを、アデラは心の奥底で恐れていたのかもしれない。従って、アジズとともに観光に出掛けるという行為を通して、インドの世界により接近することに対するアデラの潜在的恐怖が、洞窟での体験の原因であったと読むこともできるだろう。アデラは、洞窟に入る前、結婚や愛といった問題に心を奪われ、婚約者 Ronny との関係や目の前にいるアジズの肉体的魅力について思いを巡らせていたため、アデラを狂わせたエコーは彼女自身の抑圧された性的欲望の反映と読まれることも多い。<sup>4</sup>しかし、ブリッジ・パーティーでの出来事をも考慮に入れると、このエコーは、アデラが自分の婚約者であれインドの人々であれ、あらゆる他者との関係において、相手そのものではなく自分の思考が作り出した他者像と接していることを暗示する声であるように思われる。マラバー洞窟の場面においては、アデラ自身がマラバー洞窟やアジズに対する恐れを作り上げ、自分の影に怯えるように、自ら作り出した恐怖に怯えているという状況が浮かび上がってくる。

### 3. ムア夫人と神の愛の消失

アデラが、相手を観察し、思考によって分析するという態度で他者に接するのに対して、ムア夫人は、キリスト教の信仰に厚く、すべてのものを愛するという姿勢で他者と接する人物である。彼女の人柄は、物語の前半に描かれるいくつかのエピソードから窺い知ることができる。まず、彼女がモスクでインド人アジズと初めて出会う場面を見てみたい。ある夜、アジズは夜のモスクを訪れる。そこで、ひとりで歩いているムア夫人を目にした時、アジズはその女性がてっきり靴を履いたままだと思って注意する。しかし、彼女はすでに靴を脱いでいた。誰も見ていない時には土足のまま上がるイギリス



人が多いと説明するアジズに対して、ムア夫人は気分を害することもなく、“That makes no difference. God is here” (42) と述べる。このような彼女の態度は、かねてから在印イギリス人女性の横柄な態度に辟易していたアジズを大いに感動させた。この場面は、ムア夫人が、異なる宗教や人種の存在をも認めることのできる包容力を持っていることを示唆している。また彼女の優しさは、外套の掛け針にとまっているじが蜂を見つける場面にも顕著に表れている。

Going to hang up her cloak, she found that the tip of the peg was occupied by a small wasp. ... —no Indian animal has any sense of an interior. Bats, rats, birds, insects will as soon nest inside a house as out; it is to them a normal growth of the eternal jungle, which alternately produces houses trees, houses trees. There he clung, asleep, while jackals in the plain bayed their desires and mingled with the percussion of drums.  
'Pretty dear,' said Mrs Moore to the wasp. (55)

じが蜂を見ることによって、異文化の地に存在する神やそこに住む人々のみならず、動物や小さな虫にまで思いを馳せている彼女の様子は、彼女の非常に細やかな感性を示している。このような彼女の態度の礎となっているのは、“God is love” (70) と信じる心である。その内容について、彼女は次のように説いている。

'God has put us on earth to love our neighbours and to show it, and He is omnipresent, even in India, to see how we are succeeding. ... The desire to behave pleasantly satisfies God. ... The sincere if impotent desire wins His blessing. I think everyone fails, but there are so many kinds of failure. Goodwill and more goodwill and more goodwill.' (70-71)

つまり、「神はどこにでも存在し、常に人間同士が愛するように見守っている」という考えが、彼女の人生を支える信条なのである。

ムア夫人は、アデラのようにインド人との関係に一喜一憂することはない。むしろ彼女は、積極的にインド人と交流してもなかなか彼らに受け入れられないアデラとは対照的に、初対面でいとも簡単にアジズの心を捕らえることができる。ムア夫人は、愛と善意に溢れた女性として描かれているが、それでもやはり、人間関係における苦悩を経験することになる。それは、彼女の息子ロニーとのすれ違いであった。愛すること、親切にすることで人間同士は理解し合えると信じるムア夫人は、治安判事であるロニーが支配者として高圧的な態度をとるのを見て、失望を感じる。しかし、彼女の理解は、ある程度そういった振る舞いを余儀なくされる彼の職業的立場には及ばない。ロニーはインドの現実社会で、治安判事として毎日必死で働き、その経験を母親に一所懸命に語るが、ムア夫人は息子が支配者としての優越感をひけらかしているようにしか思えず、彼の楽しい様子に反感を覚える(69-70)。「本当のインド」を見出すことに夢中になるアデラに比べて、ムア夫人はずっと寛容な心の持ち主と言えるが、自らの信念をすべての状況に当てはめようとしていた点では柔軟性に欠けており、自分の理解を超える物事が存在し得ることに気付いていなかったアデラとの類似性が感じられる。これをきっかけに、“oddly enough He [God] satisfied her less” (71) と、ムア夫人は自分が信じる神の力が薄れてきていることに気が付き始めるのである。

ムア夫人の信仰心の揺らぎは、マラバー洞窟を訪れた時、最高潮に達する。ムア夫人は、このマラバー洞窟の中で言い知れぬ恐怖を感じ、一瞬気を失いかける。その原因は、大勢の人間が洞窟の中に殺到したために空気が悪くなったこと、暗闇の中でアデラとアジズを見失ったこと、などいくつか挙げられるが、何より彼女を脅えさせたものは“a terrifying echo” (158) であった。この体験後、彼女はまわりのすべての人間に対する愛情も興味も失い、無気力なまま、イギリスへ帰る船の中で亡くなり、海に葬られる。

結局、アデラと同様、ムア夫人のインド滞りも悲劇に終わる。ここで、その要因となったマラバー洞窟での体験が、彼女にとってどのような意味を持っていたかについて考えてみたい。物語の中で、ムア夫人のインドでの体

験は、次のようにまとめられている。

As soon as she landed in India it seemed to her good, and when she saw the water flowing through the mosque-tank, or the Ganges or the moon, caught in the shawl of night with all the other stars, it seemed a beautiful goal and an easy one. To be one with the universe! So dignified and simple. But there was always some little duty to be performed first, some new card to be turned up from the diminishing pack and placed, and, while she was pottering about, the Marabar struck its gong. (212)

ここで注目したい点は、ムア夫人にとってインドとの出会いは素晴らしいものになるはずであったのに、“some little duty”がそれを妨げたと述べられている点である。彼女の“duty”とは、具体的にどのようなことであったのだろうか。アデラとロニーが婚約したと知らせた時、ムア夫人は“My duties here are evidently finished” (109) と、“duty”という言葉を使って、感想を述べている。さらに彼女は、その後自分がすべきことは、イギリスに帰って他の子ども達を助けてやることだと考える。しかし、“her function was to help others, her reward to be informed that she was sympathetic. Elderly ladies must not expect more than this” (110) とあるように、他人を助けることに対する報いが、せいぜい思いやりのある人だと言ってもらえることくらいだと考えている点は見逃せない。この一節からは、自分の義務は、家族や他の人々を助け、親切にし、良い人間関係を作り出すことだというムア夫人の信念だけでなく、長年それに従って生きてきた自分の人生が、一体どれほど意味のあるものになったのか、ある種の虚しさを感じている様子をも読み取ることができる。

ムア夫人のこの疑惑は、すべてがバウムという音になってしまう洞窟の世界を体験した後、はっきりと表現されるようになる。洞窟から出た直後、彼女は“she [Mrs Moore] realized that she didn't want to write to her children, didn't want to communicate with anyone, not even with God” (161) とあるよ

うに、自分が人間だけでなく、あれほど信じていたはずの神とさえ、関わることを望んでいないと突然悟る。その後、洞窟で受けたショックによって衰弱しきったアデラがムア夫人に救いを求めてやってくるが、ムア夫人の対応は、別人のように冷淡であった。この時、ムア夫人は事件について意見を求めるアデラに対して、“Oh, how tedious ... trivial. ... Oh, why is everything still my duty? When shall I be free from your fuss?” (210) と不機嫌に言い放つ。ムア夫人の冷たい言葉からは、彼女にとって、もはや“duty”は煩わしいものでしかなくなっていることが明らかである。アデラが他者に接近することに潜在的恐怖を抱いていたのに対し、ムア夫人は長年信じてきた「神」や「善意」、「愛」といった自らの信条、あるいはそれに基づいて送ってきた人生が、無意味なものではないかという漠然とした不安を感じていたと思われる。キリストへの呼びかけさえもがバウムになってしまう洞窟の世界を体験することによって、彼女の不安は決定的なものになった。彼女にとって、洞窟のエコーは、彼女が自分の人生について密かに抱いていた恐怖や不安が巨大化した反響であったのではないだろうか。

ムア夫人が物語から姿を消す直前、彼女がインドを去る場面には、次のような一節がある。

The feet of the horses moved her on, and presently the boat sailed and thousands of cocoanut palms appeared all round the anchorage and climbed the hills to wave her farewell. ‘So you thought an echo was India; you took the Mrabar Caves as final?’ they laughed. ‘What have we in common with them, or they with Asirgarh? Goodbye!’ (214)

エコーをインドと考え、マラバー洞窟が究極だと思ったムア夫人を笑うココナッツの言葉は、彼女のインドでの体験を解釈する上で、重要な手がかりとなると言えよう。マラバー洞窟は、それがどれほど強烈な印象を与えたとしても、インドの一部であり、全てではない。アシルガールやガンジス川などの観光地で見られる美しい景色もまたインドの一面である。同様に、世の中

には自分の価値観が通用しない状況や自分の信念が役に立たない場合も存在するが、それが全てというわけではない。ムア夫人の過ちは、自分の信念が必ずしも意味のある結果を生み出すわけではないことを認識した後、その事実を受け入れるのではなく、自分の信念や人生を何の役にも立たないものとして否定し、全てを拒絶してしまったことだと思われる。ムア夫人の洞窟での体験は、自分の信念をあまりに絶対視しすぎると、それが通用しない場面に出会った時、人生そのものに希望を失ってしまう危険があることを示唆している。

### 結 び

以上見てきたように、アデラとムア夫人、2人のマラバー洞窟での体験は、自分の価値観に基づく世界に全てを当てはめようとする、一人よがりの他者理解に陥る危険性があることを教えてくれる。フォースターは、『インドへの道』の序文の中で、この本は政治を扱ったものではないと述べている。彼の言うところによると、この物語が扱っているのは、“something wider than politics”であり、“the search of the human race for a more lasting home”や“the horror lurking in the Marabar Caves”といったものだという(25)。マラバー洞窟の役割については、西洋の文明や宗教を超える究極の無を象徴するという読み、また西洋にとって不可解な地であるインドの象徴であるという読みなど、様々な解釈がなされている(Thomson 231; ストーン 304; スレーリ 204)。しかし、フォースター自身の言葉をもとに、マラバー洞窟を巡る2人のイギリス人女性の体験を検討すると、この洞窟は、アデラとムア夫人それぞれに関して、人間の社会を生きていく上で、自らの価値観に固執することの危険を浮上させる役割を担っているとも読めるのではないだろうか。フォースターは後に“*What I believe*”(1938)と題する評論の中で、“*I do not believe in Belief*”(フォースター65)と絶対的信条に対する不信感を表明している。彼は、その理由を、“there lies at the back of every creed something terrible and hard for which the worshipper may one day be required to suffer”

(フォースター66)と主張しているが、その思想の片鱗はこの物語にも潜んでいる。人種や性別の違いに基づく価値観に限らず、全ての人間が持っている各々の人生観や信条は、時には他者理解を巡る苦悩を引き起こす要因となり得るのである。

#### 注

- 1 ポストコロニアル批評の観点から論じたものとしては、Sara Suleri の “The Geography of *A Passage to India*”, Charu Malik の “To Express the Subject of Friendship: Masculine Desire and Colonialism in *A Passage to India*”, フェミニズム批評による読みとしては、Frances L. Restuccia の “A Cave of My Own: E. M. Forster and Sexual Politics”, ジェンダーの視点から論じられたものとして、Brenda R. Silver の “Periphrasis, Power and Rape in *A Passage to India*” などが挙げられる。
- 2 マラバー洞窟の解説となっている第2部の冒頭、第12章では、洞窟の中で人がマッチを擦れば、その炎が壁に映し出されるという描写の中に、「磨き上げられた壁」についての言及が見られる。Cf. “There is little to see, and no eye to see it, until the visitor arrives for his five minutes, and strikes a match. Immediately another flame rises in the depths of the rock and moves towards the surface like an imprisoned spirit; the walls of the circular chamber have been most marvellously polished.” (138)
- 3 Wilfred Stone は、『インドへの道』において、フィールディングとアデラが言葉や知性にとらわれた人物として描かれていることを指摘している。Cf. “Fielding is in the same predicament as Adela. Both are prisoners of their intellectuality, of their words.” (Stone 329)
- 4 Elaine Showalter の “*A Passage to India* as ‘Marriage Fiction’: Forster’s Sexual Politics”, Jenny Sharpe の “The Indeterminacies of Rape” など。

#### Works Cited

- Crews, Frederick C. *E. M. Forster: The Perils of Humanism*. Princeton: Princeton Univ. Press, 1962.
- Forster, E. M. *A Passage to India*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Penguin, 2000.
- . “What I Believe.” *Two Cheers for Democracy*. Ed. Oliver Stallybrass. London: Edward Arnold (Abinger Edition), 1972. 65–73.
- Martin, Robert K., and George Piggford, eds. *Queer Forster*. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1997.
- Malik, Charu. “To Express the Subject of Friendship: Masculine Desire and Colonialism in *A Passage to India*.” *A Routledge Literary Sourcebook on E. M. Forster’s Passage to India*. Ed. Peter Childs. New York: Routledge, 2002.
- Sharp, Jenny. “The Indeterminacies of Rape.” *A Routledge Literary Sourcebook on E. M.*

- Forster's Passage to India*. Ed. Peter Childs. New York: Routledge, 2002.
- Showalter, Elaine. "A *Passage to India* as "Marriage Fiction": Forster's Sexual Politics." *Be Good, Sweet Maid: An Anthology of Women & Literature*. Ed. Janet Todd. New York: Holmes & Meier Publishers, 1981.
- Silver, Brenda R. "Periphrasis, Power and Rape in *A Passage to India*." *Rape and Representation*. Ed. Lynn A. Higgins, Brenda R. Silver. New York: Columbia Univ. Press, 1991. 115 – 137.
- Stone, Wilfred. *The Cave and the Mountain: A Study of E. M. Forster*. Stanford: Stanford Univ. Press, 1966.
- Suleri, Sara. "The Geography of *A Passage to India*" *E. M. Forster's A Passage to India*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987. 107 – 113.
- Thomson, George H. *The Fiction of E. M. Forster*. Detroit: Wayne State Univ. Press, 1967.
- Restuccia, Frances L. "A Cave of My Own: E. M. Forster and Sexual Politics." *Raritan* 9 – 2 (1989) : 110 – 128.